

製品サービス領域における データ活用システムアーキテクチャ検討

名前 水島 和哉

背景と課題

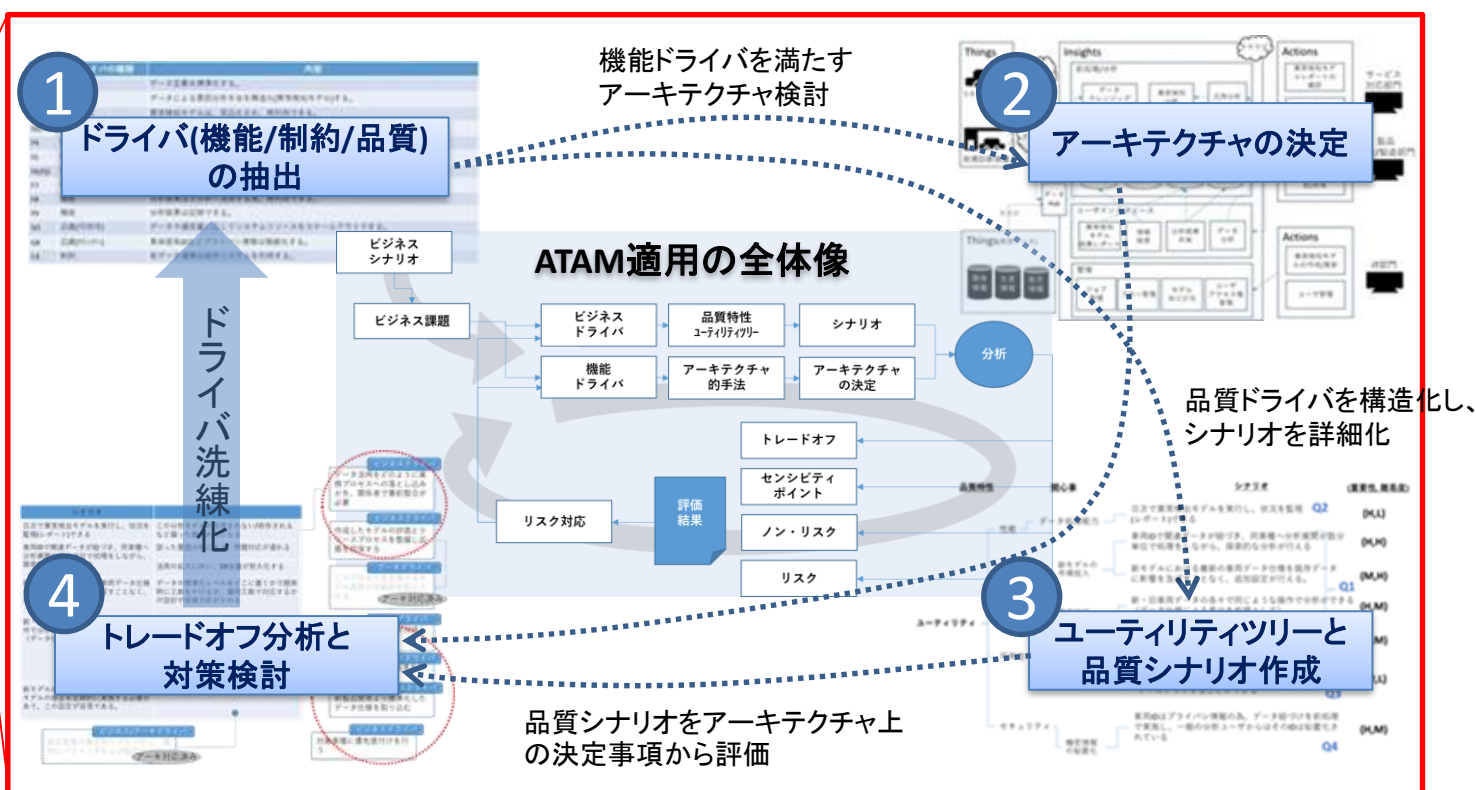
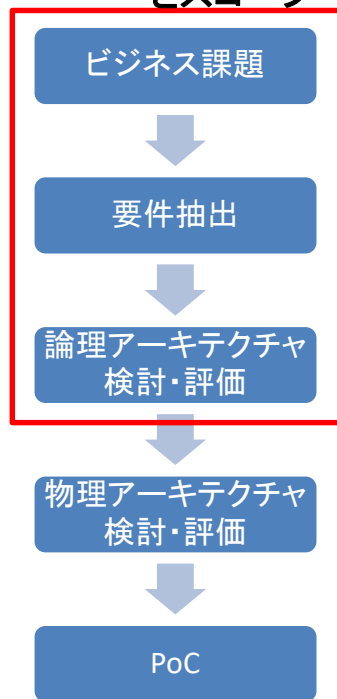
製品ライフサイクルを取り巻く様々な場面でデータが生み出されるが、その活用は分断され、限定的である。今回は、製品の不具合対応をビジネスシナリオとし、統合的なデータ活用によるシステムアーキテクチャを検討する。

手法・ツールの適用による解決

ビジネス課題からドライバを抽出し、アーキテクチャと品質要求とのトレードオフを分析を実施した。これにより、ビジネス課題を満たすドライバの過不足を評価し、アーキテクチャの洗練化を実現した。

ATAMを活用したアーキテクチャ検討と評価

■取り組み内容 とスコープ



ATAM評価結果と今後

■ATAM評価結果

- システムアーキテクチャから12件のリスクを抽出し、対応要否(許容/要対応)に分類
要対策:7件、許容:5件
- リスク対策からビジネスドライバ(制約)を6件抽出
アーキテクチャ前提となる制約条件の不足を検出

■今後

- ドライバを詳細化、物理アーキテクチャを検討する
- ビジネスドライバとシステムのトレードオフ評価を行う(PoC)

ATAM適用効果のまとめ

■利点(効果)

- ドライバ整理を説明できる形(半構造化)で行える
アーキ先行になり、見落としがちなドライバ整理を充足可能
記述形式がビジネス側との対話に適し、そのまま活用可能

■改善点

- 単独での分析を基本としていた為、ビジネス視点分析が弱い
ドライバ整理には専門知識を有するメンバーが必要
- 主観的な評価になりがちの為、第三者による評価が必要
第三者によるレビューの設定が必要